

この施設(プライエム)に住む人は、みんな脳に障害があったり、認知症だったり、家族の家でのケアが難しい人が集まっている。そして、ケアの必要な人の尊厳を守り、職員ではなく住む人自身が決める個人の行動や過ごし方を大切に、同じ目線で対応することを大切なルールとしている。

特徴のひとつは多様性を認めていること。どこの出身とか 外国人でも関係なく、ケアが重くても軽くてもその人個人の個性を、多様性を大切にしている。そして今では、入居者の方は21か国からなり、仕事をしている従業員は24か国、施設の中では35の国の言葉が利用されている。多様性があふれた施設である。言葉だけでなくそれぞれの好み、例えば、動物好き、



広い施設の廊下

飲み物好き、音楽好きなど多種多様な好みをひっくるめて、お互いを認め合う多様性を重視している。好みが異なると、ごちゃごちゃとしていて複雑になりやすいけれど、それが楽しみでもあり、職員は多様な文化を学ぶレクチャーも受けている。職員は、ヘルパー、ヘルパーアシスタント、理学療法士、作業療法士、医者、コックなどあらゆる事態に対応できるように様々な専門家が揃っている。

この施設(プライエム)では、個人を尊重するので、敢えてつきっきりでヘルプをしていない。グループを作っていて、部屋に閉じこもるのではなくグループ毎に外で活動することにし、みんなが互いに目が届くようにしている。

午前中はリハビリやトレーニングをする人が多い。身体的なものだけではなく精神的なものもリハビリであり、例えば新聞を読むこともリハビリの一種であると考え、利用者である個人がリハビリだと思えばそうである。施設(プライエム)には6つの部署があり、入居者はそれぞれ24人が部署ごとに個室を与えられていて、2



階建ての施設でそれぞれ個室ごとに暮らしている。中庭を中心にして周辺に各フロアーが四角いドーナツ形に四辺につながっているので、フロアーを周回することもできる。さらに職員自身も1フロアーに一人きりにならないところもいいところである。なお、ご夫婦の利用者の部屋は一緒でも別々でも対応可能である。

施設(プライエム)には、色々な部屋があるが、入居者の顔見知りの人がいることが安心感に繋がると考えている。入居者のご家族も利用することが多いが、それぞれ顔見知りなので安心感に繋がっている。さらに、入居していてもしていなくても施設を利用することができる。もともとはケアの上にケアを重ねるやり方であり、入居前のこれまで生きてきたものの延長として過ごす場所として、入居後も同じように施設(プライエム)で過ごすことを重要視している。

施設(プライエム)には、認知症よりも重い症状、例えば寝たきりの人は、ほとんどいない。また、日本では特別養護老人ホームへの入居待ちの方がたくさんいるが、デンマーク・コペンハーゲンでは、待機リストはあるが、4週間以内にはどこかの施設に入所させないといけない規則がある。だから最大4週間が待機時間であるが、仮に自宅待機の場合でもヘルパーさんが最大1日6回来てもらえる。この施設にいる人はヘルプが必要な方ばかりで、さらに自分自身に危険が及ぶと判断し入居している場合もある。入居する場合の保証は自治体が面倒を見る。家賃や光熱費や食事代など十分な年金がないと入居できないが、市に申請すれば補助金が与えられ、困っている人は施設に入れて助けてあげるという考え方が根付いている。

前述のインゲおばあちゃんは80歳を超えていて、施設(プライエム)の隣の敷地に併設する自室(プライエボーリ)に一人で住み、「ダンナは若い女と出て行った」と笑って教えてくれた。子どもや孫と映った写真を整理された部屋に飾り、クロスワードパズルをし、そして隣のプライエムに毎日遊びに行く。洗濯機やシャワーも自宅にあり一人で生活ができている。約15万円の

家賃の半額を年金、残りを自費で払っているそうだ。最近では自室(プライエボーリ)の推進をデンマークの国策とする介護福祉政策に移ってきているようである。

日本の大問題は、施設で働く人の給料が安くて、きつい仕事で、働く人がやめていく。事業主は介護保険のお金では足りなくて、従業員に給料をあげ



充実した研修室の中

られない。日本の現状をどう考えるかという問いに、「日本の状況は簡単に想像できない。日本の介護職員が自分の仕事に誇りを持っていないのは非常に残念なことだ。デンマークでは介護職は給与が特別高い仕事でもないが、人手不足ではないし、高い教育を受けている人

が多い。長い間税金を払っているのでヘルプが必要になり自分で決断できなくなった時に社会が面倒見てくれることは当然である」とメレテ・アガーさんは答えた。さらに、認知症になった方に大きな家は必要なく、個人それぞれにとって自分に必要な生活スペース、家の広さは変わってくる。最近では大きな家が無駄になっているというデンマークの現代社会の課題もある。とも述べていた。

<まとめ>

最後に、メレテ・アガーさんに、ご自身が年を取って この施設プライエムに入りたいか？と聞くと、「家族の介護が必要になった時は、自分自身でもこの施設を利用したいわ」と言っていた。自分自身が働いている施設を将来 自分で利用したいと思えることはとても大切なことだと感じている。超高齢社会に日本が直面する中で、愛媛の介護福祉政策にとって、個人と多様性を重視するというデンマークの福祉政策は、大いに考えさせられる視察であった。

7 おわりに

愛媛県議会海外派遣（北欧）議員団長 笹岡博之

今回の派遣団の構成メンバーは超党派であり、個々の政策課題については立場を異にすると認識している。しかし、それが調査活動を大いに活性化し有意義なものとする一因となったと確信する。特に訪問を受け入れてくれた施設での質問の際や議員団のメンバー同士でディスカッションをする中で、それぞれ考えを深めることができたと確信している。私自身にとっても、多様性ということを確認する良い機会となった。全てが学びの場となったが、印象に残っていることを付記しておきたい。



ヘルシンキの日本大使館で

今回訪問した3か国で、それぞれ日本人通訳やガイドさんにお世話になった。それぞれに人種差別について自身が経験されたか聞いたが、全員が1回も無いとの回答であった。人権意識と文化的背景、教育の質等が考えられるが、総じてやさしい人が多いと感じた。こちらが困っているとみると、やさしく手を差し伸べてくれるという印象である。人間に余裕があるという表現が正しいかもしれない。

各国の状況はもちろん違う。今回の訪問国は3か国ともEUには加盟しているが、フィンランドとスウェーデンはNATOには加盟していない。地政学的なもの、歴史的背景からそうなっていると聞くが、これが教育やエネルギー問題とも密接に関係していることも学ぶことができた。

個人的にはデンマークの福祉・介護の考え方に感銘を受けた。高齢者が介護を必要とした場合、すぐには介護サービスを実施しない。先ずはリハビリである。これで8割の人が介護サービスを受けない状況に持っていく。日本では、厚労省が病院から在宅へ誘導しようとしているが、その間に徹底したリハビリが必要



ゲフィオンの泉の前で

ではないだろうか？自分でできることはできるようにしてあげる。辛いリハビリも楽しくできるような環境を整える。学ぶことは多い。また、社会保障については、政争の具にはならないと痛感をした。消費税が25%、所得税が40%以上という高負担の地が北欧である。政治への信頼がなければ、この高負担に応えられないし、政治に対しての意識も高いと感じた。

最後に、今回の派遣にご尽力いただいた関係の皆様には心からの御礼を申し上げます。今回学んだことを、それぞれの立場から議会活動や要請・要望に活用することを誓い合っており、おわりのご挨拶とさせていただきます。

感謝。



ローゼンボウ宮殿で